

# 秘密結社

声優はVisualに出るな！会議

# TCVV

<http://www.tcvv.org>

TCVV 白書(インターネット公開版)

The TCVV White Paper(INET-ReleaseEdition)

-アニタレは要らない-

声優は Visual に出るな!会議

The council of 'Voice actors should not appear in Visual'

本誌は萌えません。 (冗談です)

## 声優は Visual に出るな！宣言 Ver1.11

声優は Visual に出るな会議 決議第 00000 号

声優は映画俳優・舞台俳優に比べ声だけで勝負をするという過酷な生業である。映画・舞台俳優は身振り手振りが付加されるので視覚に訴えることが効く。が、声優はそうは行かない。だからこそ高度な演技力が必要とされるのではないだろうか。現在、第四次声優ブームと言われているそうだが、何か違和感を感じずにはいられない。最近の「声優」と呼ばれる人々は Visual、その他のメディアに頼りすぎ・出過ぎではないだろうか？

今やマーケティングでメディアを十分に活用すれば、そこら辺のお姉ちゃんでも CD をあっという間に売ってしまう。この状況を「沈黙のミリオンセラー」<sup>1</sup>とは良く言ったものである。「声優」自体が今やメディア戦略によって商品になってしまったと思う。この戦略は聴衆を気がつかない間に購買者に変えてしまう巧みなシステムだと考える。しかし、このシステムは本来の価値。つまり「声のプロフェッショナル」としての声優を正当に評価していないものであると言える。

舞台俳優の中には決して Visual に耐えられる人ばかりではない。が、そのような人が舞台に立てるのは、人を引き付ける演技力を持っているためであると考え。一方、声優の質は低下している。これは最近のアニメーションは高度な演技力を必要としないものが多くなっているからといえよう。そうなれば声優の質が低下するのは至極当然のことである。<sup>2</sup>従って、高度な演技を必要とする作品では声優の能力の限界が露呈してしまう。例えば、劇場版新世紀エヴァンゲリオン最後の最後はアスカのほんの一言で終わる。<sup>3</sup>しかし、この台詞は始めに用意してあったものとは違うものであったようだ。本来は「あんたばか？」であったようだった。が、声優の力量不足のため、結局「気持ち悪い。」へと変更を余儀なくされた。完全に声優が役に負けてしまっていたのである。結果、作品は中途半端に仕上がってしまい損害を被ったのは我々聴衆者である。

声優が新境地を求めるのもいい。しかし、声優も役者であるのだからまず足場を固めてから進出するのが筋と考える。我々は、健全な日本アニメ・マンガの質を守るため、ここに「声優は Visual に出るな！」を宣言する。

<sup>1</sup>誰も知っている訳でもないのに 100 万枚以上売ったレコード・CD のこと。一昔前は 100 万枚といったら大部分の人がその曲を知っていた。

<sup>2</sup>劇場版 Evangelion のパンフレット(春、夏ともに)にて清川元夢氏はプロ意識なき声優への批判とも解釈できる発言をしている。これは非常に勇気ある発言と言える。(普通はこういう事は映画のパンフでは言わないであろう。)

<sup>3</sup>実は Evangelion はヲタク(庵野氏)によるヲタク批判であったことはあまり報じられていない。ヲタクの皆様はそのメッセージを受け取れなかったとのこと。(レイとシンジが列車に乗っていて会話をするあのシーンが批判部分とされている)

## 改訂版によせて

初版を出した頃、こう言うのも何なのですが「こんな本売れるんかいな」と思い十分な部数を用意しませんでした。

が、フタを開ければ意外な反響で当日、購入出来なかった方々に大変御迷惑をおかけしました。

このほど初版の内容をそのままに誤字脱字のみを修正した改訂版を御用意いたしました。

同時に出ました TCVV 白書 2 もお手に取って頂ければ幸いです。

今回、配布ライセンスとして GNU FDL-1.1 の採用を検討しましたが、FDL の条文がまだ十分に読切れていない状況なので配布は従来通りの方法とします。

2002 年 8 月 4 日 TCVV 議長 萱沼真一

## 目次

1 白書発行にあたって	6
2 TCVV について	7
3 アニタレ批評の新しい概念「がんばれ!みやむー」総論	8
4 研究「1次従属な声」	12
5 おわりに	14

# 1 白書発行にあたって

「何で演技が大して巧くもないのに声優(アニメタレント<sup>4</sup>、以下アニタレ)が顔を出して、大して上手くも無い歌をうたったり、写真集を出したりするんだ。」

こんな違和感を抱いたのは長期慢性的なアイドル不在という風潮まっただ中の今から6年前。

今ではすっかり日常的な話となってしまったが当時は本当に腹が立った。

ヘタレな演技しか出来無いのに露出だけは一人前。ハッキリ言って、アニタレ共が雑誌、TVを賑わせるとおもしろくない。むしろ不愉快である。

アニタレを見て一番腹が立つのは「お前らふざけてるのか!」ということだ。

本業そっちのけで企画モノのCD出したり、全国ツアーとかやってみたり、ラジオでDJやったりとアイドル気どり。まさにやりたい放題である。悪貨が良貨を駆逐するとは言ったもので、その後次々とアニタレが増殖し今や石を投げればアニタレに当たる程まで増え、まともな演技をする人々の立場というのが脅かされている。TCVV宣言で紹介した清川元夢氏の言葉はその状況を如実に表わしていると思う。昨今の状況が当たり前なこととなって感覚が麻痺しそうな時、この言葉を思い出すと現在の異常な事態が再認識出来る。

「このままでは、日本が誇る文化を駄目にしてしまう。」

「ヘタレ演技によって不良品な作品が粗製乱造されるのを放ってはいけない。」

そんな危機感を抱いていた1997年8月、我々は清川元夢氏の言葉を信条に未熟な役者に精進を求めることを目的としたTCVVを設立させた。

「声優はVisualに出るな!会議(The Council of ‘Voice actor should not appear in Visual’)」という名称は、その憤りをそのままあらわした名前になっている。<sup>5</sup>

TCVVでは「似非声優」、「なんちゃって声優」、「声幽」と「本物の役者」との区別するため「アニメタレント」を略した「アニタレ」という造語を作成し「本物の役者」との区別を明確にして来た。また、TCVVでは信頼出来る筋以外の情報は採用しない方針である。間違った情報を元に活動していたのではTCVVの信用問題となりうるためである。従って、どんなに遠くても4ホップ以内での情報しか採用しないことにしている。これは4ホップが十分な信頼性と事実確認が取れる限界点だと思われるためである。

TCVVへの賛同者は多い一方、批判的な方々も多数いる。そのためTCVVでは意見箱を設置し活動が適正となるように出来るかぎり多くの意見を収集し偏見が無いよう努力している。

時折、意見箱に「声優のこと何を知らないないクセに云々」という意見を頂く。が、これは筋が違うものと考え。TCVVは声優がVisualに出ることを全面的に反対している訳ではない。極論すれば、私どもは視聴者として結果だけを貰えればよい。プロは結果が全てである。だが、すべきことをしないまま、作品をブチ壊す諸行を黙って見過すことは出来無い。「やるべきことをやってからの後に、やりなさい。」「視聴者をバカにした演技をするな。」と主張しているだけである。

「批評」と「批判」は違う。TCVVは日本アニメを保護するために、ゴマメの歯軋りと言われようが諫言<sup>6</sup>役となれるように思っている。

これまで我々は、第一段階として業界全体の分析を行ってきた。

これからは第二段階として、より建設的な話をしなければならないと思う。

本白書は我々TCVVがこれまで研究して来た分析成果を紹介したものである。

なお、これから先に具体的な人名が出て批評するが激昂しないようにくれぐれも願いたい。

<sup>4</sup>アニメタレントの正確な出典元は「国際おたく大学'98」の声優論(pp.187)

<sup>5</sup>現在、TCVVにおいて「声優」とは「本物の役者」を指している。ゆえに「声優はVisualに出るな!会議」はやや正確性に欠ける。が、既に定着した感があるので名称変更は考えていない。

<sup>6</sup>目上の人の非をいさめること。また、その言葉。

## 2 TCVVについて

### 主旨

身分をわきまえずに画面・映像に登場している未熟な声優達に抗議をするとともに役者として精進を求めることを目的とする。

### 1.TCVV 年表

- 1997 世の中の似非声優を批評するために「声優は Visual に出るな!会議」を設立
- 1998 「がんばれ!みやむー」連載開始
- 1999 tcvv.org 取得
- 2000 アニタレアンテナ設置 (<http://www.din.or.jp/~kaya-z/wdboot/>)
- 2001 コミケット 61 参加

### 2. 組織

- 議長:TCVV 代表
- 分科会:常設している分科会でテーマ毎の議論を行う。
  - 反みやむー分科会
  - 反國府田マリ子分科会
- 調査部会:分科会への準備部会。ここでの勧告により分科会が設置される。
- 対策本部:緊急に対処しなければならない事態が発生した時に設置される分科会。
  - 椎名へきる問題緊急対策本部
- 技術部:TCVV の運営を INET 技術的側面から支援する。  
tcvv.org メンテが主な業務。現在、レンタルサーバで運用してるサイトを早々に自前で運用する予定。長期的な計画では知識ベース技術を使用したデータベースの研究開発をおこなってこれを運用すること。

### 3. 活動

活動の場は主に INET。 <http://www.tcvv.org>

IRC:%tcvv

### 4. その他

本会に賛同し参加して頂ける場合には [info@tcvv.org](mailto:info@tcvv.org) まで連絡を願いたい。

### 3 アニタレ批評の新しい概念「がんばれ!みやむー」総論

反みやむー分科会座長

「がんばれ!みやむー」<sup>7</sup>は反みやむー分科会座長である私が活動らしいことをするために1998年9月から書き始めた声優批評コラムである。今ではすっかりで声を聞かなくなってしまったが、当時、宮村優子はアニタレの象徴的な存在であった。まさに栄枯盛衰、盛者必衰の理を表わすという感じでアニタレの行く末を暗示させるかのようである。

この文章を読まれる前に断っておくが、ここで言う「声優」とは本物の役者であり、いわゆる「アイドル声優」とは区別する。「アイドル声優」、「似非声優」等、本物の役者以外は全てアニタレと呼称とする。

さて、今回は紙面の都合上、毒抜きで解説する。本文をお読みになって興味をもたれたのであれば是非、WEBサイトの連載記事を一読することをお勧めする。こちらの方は、かなりの猛毒が含まれており、この文章より面白いと思う。

これまで「がんばれ!みやむー」では演技力が無い、声も単色しか出ないアニタレが何故、爆発的に増殖して来たのかを構造分析してきた。

通常の声優批評には無い切り口として「雑誌、アニタレ、声優ファンの複雑系的3ツ巴構造モデルとしての評価」をしている。今回は、それを総括してみようと思う。

#### 1. 無批判なメディア

少し話題がそれるが先頃<sup>8</sup>、またIE(インターネット・エクスプローラ)に重大なセキュリティホールが見付かった Windoze<sup>9</sup>。ここまで来ると Windoze では何が起きてても不思議では無い。これまで、幾度となく重大なバグが見付かって来ても巷の大半の計算機雑誌は、未だ無批判に提灯記事を並べたてている。

しかし、最終的に被害を被るのはエンドユーザである。何も考えないで1私企業の言なりになっているのは健全な姿とは言えないのではないかと思う。

話を元に戻そう。これと似たようなことが声優雑誌でも起っている。無論この場合も被害を被るのはユーザたる視聴者である。

本来、諫言役であるべき雑誌が「密着取材」やアニタレ共の下らないエッセイやグラビアばかりを掲載しヘタレな演技をしても何の批評もしない。むしろ、アニタレを煽るような提灯記事ばかり書き立てアニタレを「ボイスアーティスト」とか「声優アーティスト」と称して声優の本来の意味を歪曲させずらす。巷にあふれる声優雑誌は、声優の本来あるべき姿を歪曲してると言わざるえない。

以前、本文でも書いたが宮村優子がイベントで倒れた時も、「大事に至らなくて良かった」と呑気に書きたてていた。声優の本来の本分を考えたら、とてもこんなことは書けない。むしろ、徹底的に批判すべきである。清川元夢氏は劇場版新世紀エヴァンゲリオンのパンフレット中で「役者は風邪を絶対に風邪をひいてはいけない。ひいても他の人の迷惑になってはいけない」と語っている。これこそ本来の声優、役者だろう。声優雑誌は、そこをところを理解しているのだろうか。

さらには椎名へきる。しばしば他の声優批評でも「あーていす様」と揶揄されるように本人はかなり本気でアーティストを目指している御様子。これまた雑誌は「マルチな活動」と称賛する。

<sup>7</sup> <http://www.tevv.org/miyamu/> 宮村優子を応援している訳ではなくアンチテーゼとしての意味。

<sup>8</sup> 初版当時の2001年12月当時。

<sup>9</sup> 誤植ではない。WindowsXXを総称してこう呼ぶ。

しかし、本業をおろそかにして、何がマルチか。バブル期の日本において、本業を忘れた企業は現在そのツケの支払で大変なことになっている。アニメ達も本来の業務を忘れたバブル企業と本質的には同じではないか。土地神話よろしく声優神話の様相を呈している。

## 2. アイドル指向

ずいぶん前からアイドル崩れな人達を声優としてリサイクルさせる動きがある<sup>10</sup>。非常に憂慮すべき事態であり声優という職業を愚弄するもので断じて許す訳にはゆかない。

さらにアニメ自身も何を勘違いしているのか自分を人気アイドルか何かだと思っているようである。実績のないままいきなり歌とか唄ってアイドル気取りで、へたすればコンサートまでやってしまう始末。水野愛日なんか本格的に声の仕事するより先に歌を唄っていた気がする。

ポスト宮村優子の高橋美佳子は「えびたい」という番組でアニメが生成されてゆく過程をリアルタイムで実践して来たと言っても良い。

椎名へきるに至っては手の施しようが無い。脱声優とか言ってロック歌手の真似ごとをやっているようだが軸足が未だアニメ系に向いている。しかも、アニメに対して何もしていないのに前述した雑誌が無批判に彼女を取り上げるものだから hm3 や声優グランプリの表紙になってしまう。そんなことなので、さらに調子に乗ってしまう。

彼女にとって声優雑誌は「絶対に批判されない安全地帯」。居心地がいいのだろう。「本物の芸術家」なら、アニメでない土俵で勝負しろと言いたい。未だアニメ軸足を置いている以上、彼女にアーティストとしての未来は望めないだろう。しかも、へきる同様に軸足をどこに置いてるか分らないアニメ様は沢山いる。

「がんばれ!みやむー」では元祖アニメ「國府田マリ子、椎名へきる、宮村優子」をメインに取り上げて来たが、ここ1年程、彼等は一服感がある。逆に、ここ最近、台頭して来た勢力として「川澄綾子、堀江由衣、榎本温子、田中理恵」らがいる。

当然、彼等の声は単一となりがちで幅は皆無であることは言うまでもない。いずれも「可愛い系声」で飽きが来やすい。

まあ、田中理恵に関して若干、幅があるように思える一方、地上波キー局には一切、メインキャラとして登場したことの無い謎なアニメである。<sup>11</sup>

また、いわゆる「ロリ声」勢力として「釘宮理恵、金田朋子、田村ゆかり」が台頭して来た。こちらの場合、単色の声ではあるが他の追従を許さない点で今のところ安泰であるようだ。ただ、この手の声は予備軍が後から沢山やってくるので演技力でカバーしないと、お先が見えてしまう。また、ある意味、「非常に奇異な声」であるため、声優雑誌の標的になりやすく後述する「アニメスパイラル」に巻き込まれやすい。(既に巻き込まれているという話もあるが...)

ちょっと前まで注目されていた小西寛子。かなり良いところまで来ていたのだが、非常に残念なことに事務所の方針変更によって声優の道を閉ざされてしまった。このことは声優という全体集合の存在意義を根本から否定する暴挙だと考える。

話を元戻そう。視点を変えるとこんな見方もできる。

供給過多であるアニメは御飯を食べるために必死に行動する。その結果が本業以外の諸活動ではないだろうか。

例えば、一部の人間に絶大な人気を持つ「麻績村まゆ子」。彼女こそ、まさにその部類だと思われる。大した芸もなく、殆どゲームの声を当てるか、OVA に出るか CD を出すかしか活動をし

<sup>10</sup> そー言えば大森玲子ってどこいってしまったのだろうか？

<sup>11</sup> ホントに面白いと感じる。音楽事務所が椎名へきると同じ SONY music なのだからさらに気になる。

ていない。

このように粗製濫造された大量のアニタレ様たちはコスト削減の一環として OVA 等に大量使用され、結果として作品の品質低下を招く。<sup>12</sup>供給過多な状況では、これが現状だろう。

こんな状況下で果して、まともな演技をしてくれるか甚だ疑問である。

### 3. 身近なアイドルを求めるファン

本来、「アイドル」と「役者」は別物。しかし、長期慢性的なアイドル不在というものがサブカルチャー文化に呼応してアニタレという本来、存在しないハズのモノを実体化させた。十数年前に流行った「身近なアイドル路線」がそのまま声優に継承され、偶像 (IDOL) として奉り上げられ、神格化さえしている。そうすると、もうそこには演技なんてパラメタは入る余地など無い。ただ、ファンはひたすらにアニタレを追いかけるだけである。

まさに「声優ファンという高速中性子が声優雑誌という高速増殖炉で自然界に存在しないプルトニウムのようなアニタレを次々と増殖させている」という比喩表現がピッタリと当てはまる事象である。<sup>13</sup>

### 4. 中間まとめ

以上をまとめると、

まず、メディアが無批判に似非声優を扱うことから始まる。

これによって作品自体の関心よりも専ら似非声優にのみに関心を示す「声優ファン」が発生する。そして、メディアは「声優ファン」をターゲットにさらなる提灯記事を書く。批評無き世界に成長はない。本来なら淘汰されるべきハズの似非声優はメディアによる「ぬるま湯」に浸かっているために「アニメタレント (アニタレ)」いうものに変化する。さらにさらにメディアは調子に乗って提灯記事を書きまくる。すると今度は、これらアニタレに感化された、若者が声優という職業に錯覚に近い憧れを抱き、甘い誘惑に狩られる。その結果、養成所は大繁盛。しかし、絶対的需要は無く、しかも実力もないので、養成所を出てもギャルゲ - 行きが関の山。これが声優バブル。一方、資金面で苦しい OVA 制作サイドは渡りに舟ということで質が悪く使えないハズの「アニタレ」を使ってしまう。当然、作品は低品質のものに仕上がってしまい、それらが巷に氾濫する。そうこうしているうちにアニタレファンのために TV などにもアニタレが進出し、結果として次々と作品をぶち壊す。しかし、雑誌等メディアは無批判で知らん顔。

結局「アニタレはいつまでも淘汰されない。」という状況は終わらずこれら複雑怪奇な状況も終わらない。声優とそのファンと作品とメディアがつながる点と線。かなりの複雑系な世界。これを「アニタレ・スパイラル」と呼ぶことにする。「がんばれ!みやむー」では、これを踏まえて「ヲタク経済論」の試論を発表した。<sup>14</sup>

さらに社会的ジレンマモデルを採用して構造分析を行ったところ、アニメ界は社会的ジレンマに陥っていることが判明した。声優全員が一致して演技に励み良い作品にしてゆこうとすれば最良の結果が得られる。が、一人が歌手活動等で甘い汁を吸うことを始め、個人に「何らかの利益」が出た。すると、とたんに周囲が真似をはじめめる。

<sup>12</sup>アニメにも ISO-9001 が欲しいと思うのは私だけでなだらう。

<sup>13</sup>因にウラン 235 は「燃えるウラン」と呼ばれる。さしずめ、アニタレは「萌えるウラン」ってところか。で、放射線を出しまくって日本アニメを 崩壊させる。

<sup>14</sup><http://www.tcvv.org/miyamu/econo.html>

ここが声優がアニタレとなる瞬間。

更に、これに群がる数々の利権が混じる。

そしてアニタレが大多数になった時、少人数の声優が孤軍奮闘して「良い作品をつくろう！」と言ったところで、もはやそれはアニタレ個人にとっては不利益なだけ。大多数のアニタレが歌手活動やらコンサートをしてヲタク受けする作品ばかりになったりすると演技力がなくても作品に主役級で出演出来るので、真面目に声優をやっている人には全くうま味がない。

だがしかし、これを続けてしまったらアニメ/声優の地位低下や地盤沈下を起こし最終的には全体の不利益となる。

ここでのポイントは全員一致団結すれば最良の結果が出るところが、「私だけなら」とか「私一人がガンバっても...」ということがジレンマ状態を引きおこし最悪の結果を招いてしまうということ。この一連の過程こそアニタレがアニメを壊して行く過程だと推察される。

しかも厄介なことにこのジレンマは容易に解決することは出来ないと思われる。そして、この途中生成物が「アニタレファン」であろう。確かにアニタレに入れ込むのは気持ちが良いものだと思う。難しいことを考えないで当該タレントをアイドル感覚で共にいれば至極の境地であろう。

しかし、そんな気持ちがアニタレの温床を作り、ますますジレンマを加速させるのである。

ゆえにアニタレはアニメとファンを食い物にしていると私は確信する。

## 5. ベテラン不在

上記のことは長期的な視点から見ればベテランが不在となる世代の空白地帯(ジェネレーションギャップ)が出来てしまうことを暗示している。

ベテランが不在となると、この先アニメ以外の分野、例えば映画の吹替えやナレータ等を行える人間がいなくなってしまうことである。

声のプロフェッショナルたる声優がベテラン不在では声優の存在理由がおびやかされ、ひいては声優界全体の地盤沈下を招いてしまうと思う。

「かわいい声なんざ100人もいない」

この空白地帯を埋めることが出来るのは幅広い声と十分な演技力を持つ役者以外はいない。

現状、数少ない中からベテランになりそうな人間として、私が考える者として桑島法子、長沢美樹をあげたい<sup>15</sup>。

ここで、このような評価をすると一悶着起きそうであるが、各人とも、現状のアニタレと違う方向性を持っており十分な演技が出来てると思われ将来性があると判断している。

ただ、桑島法子については他のアニタレ同様、調子にのってしまったらアニタレとなってしまう危険性ははらんでいる。先頃、その徴候が見られるだけに不安である。

## 6. まとめ

以上、「がんばれ!みやむー」で述べて来たことを総括すると、

淘汰が行われぬまま放置しておくことで短期的には作品の品質低下を招く。

また長期的には世代の空白地帯が発生しアニメ作品のみならず声優界全体へ問題が波及するという非常に恐ろしい現実が待っているとされる。

これからの「がんばれ!みやむー」ではアニタレ撲滅のための提言を行ってゆきたいと思う。

<sup>15</sup>実は「沢城みゆき」は一度悪役をすると急成長するのではないと思われる。

## 4 研究「1次従属な声」

萱沼 真一

2001年12月29日

### 概要

ベクトルを用いて役者の声の幅を定量化する方法を考察した。

### はじめに

最近のアニタレの声の特徴というのは使い捨てされやすい、所謂「可愛い声」ばかりである。これらに共通するするのは、皆、単色単一。演技の無さ以前に声の幅が全然ない。Internet上で連載している「がんばれ!みやむー」ではこのことを「声のダイナミックレンジが狭い」と表現してきた。

声優にとって多彩な声が出るということは当然であり、戦略上大きな武器となると考える。が、しかし最近のアニタレは、どういう訳か単一の声しか出せない。しかも需要を無視した供給過多な「可愛い声系」は、それゆえすぐに飽きられ使い捨てられてしまう。アニタレがいなくなるのは結構なことだが代替も多数いるんで一向減ることはない。その上、演技がなっていないのでどうにもならないし、そんなのを聞かされる方は迷惑この上ない。

例えば、ここ1年の間に人気を獲得してる堀江由衣。彼女は一目すると複数の声が出るように感じるが実は、殆ど特徴は変わらない。元々の可愛い系声でムリして他の役を演じてるとしか聞こえない。確信してやっているのなら別であるが、とてもそうとも思えない。むしろ人気という馬力だけ行っていると思われる。

川澄綾子にいたっては完全に単色。彼女の場合、「叫びキャラ」としての一定の成果を収めている<sup>16</sup>傾向にあるが、声の幅は非常に狭い。声優と名乗るからには複数の声を使い分けられ

て当然だと思う。

「声のダイナミックレンジが狭い」というのは声優として致命的欠点を持っていると言わざるをえない。

ところで「声のダイナミックレンジが狭い」というのは定量的にどのように計測すれば良いのだろうか。それを測定するために本研究では数学のベクトル解析にある「1次独立」と「1次従属」という概念を用いて測定できないかを考察した。

### 「1次独立」と「1次従属」

まず、線型代数における1次独立、1次従属について簡単に解説する。

ベクトル空間  $V$  においてベクトル  $v_1$ 、ベクトル  $v_2$  およびベクトル  $v_3$  の1次結合

$$c_1v_1 + c_2v_2 + c_3v_3$$

を考える。実数  $c_1, c_2, c_3$  が0でない以外に、この1次結合が0ベクトルになる時、ベクトル  $v_1, v_2, v_3$  は互いに1次従属であるという。

一方、実数  $c_1, c_2, c_3$  が0以外に0ベクトルにならない場合には1次独立であると言う。

1次独立であるということは空間ベクトル  $v_1, v_2, v_3$  の始点を同じ点にあわせたとき、空間ベクトル  $v_1, v_2, v_3$  が同一平面内に含まれないことを示しており、逆に1次従属であるということは同一平面内に含まれるということを意味している。(図1)

<sup>16</sup>しかし、叫び声が巧いとは言えないが。むしろ、巧く叫ぶことの出来る人間の方が少ない。

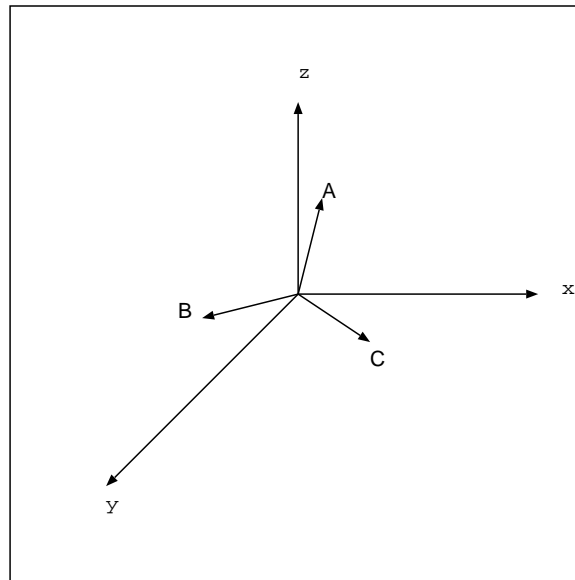


図 1: 1 次独立

## ベクトルを用いた声の幅の評価

そこで、この概念を声優の声質の評価に適用することを考える。例えば、x 軸に性別 (男声/女声)、y 軸に性格 (明るい/暗い)、z 軸 (役年齢) を割り当てる。声優 1 人に対して作品別に 3 作品評価し、それぞれの作品別に声の特徴をベクトル化する。この時、評価したベクトルを「声ベクトル (voice vector)」と定義する。次にそれぞれの声ベクトルから 1 次結合をとる。さらに 1 次結合を解析し、1 次独立となるのか 1 次従属となるのかを分析する。

アニタレの場合、演技力が無いため単一な声となってしまう。すなわち、声ベクトルは同一平面に存在すると考えられる。よって、アニタレはすべからず 1 次従属となってしまうものと推測される。逆に 1 次独立であるなら、声ベクトルは同一平面にないということであり、それは、すなわち全く違う声が出るということと推測できると考える。

現在、この理論で具体的に分析した訳ではないが、前述した堀江由衣の声ベクトルは 1 次従

属となってしまうことが容易に想像出来る。逆に TCVV で高く評価している桑島法子は多数の声が出るので 1 次独立になると思われる。<sup>17</sup>

## 今後の課題

さて、この理論は概論であり、定量的な分析のためには越えなくてはならない課題がいくつか存在する。まず、軸をどう取るかである。

それぞれの 3 軸は互いに無関係でなければならない。すなわち「直交する評価項目」である必要である。3 軸に違う性質の評価事項を割り当てないと正しい声ベクトルが算出出来無い。

さらに、声ベクトルを評価するための「単位ベクトル」も決定しなければならない。これは「評価の基準」を作ることに他ならない。「がんばれ!みやむー」および「意見箱」でも議論があるように、明確な判断基準を策定しなければならず、さらなる検討を必要とする。

最後に、この理論が確立して「あの人は声が 1 次従属だから駄目だね」という会話がやって来ることを願いたい。

<sup>17</sup> 代表的なユリカ声だけであれば明らかに駄目でこの先、使いモノにならんかったろう。しかし、最近の研究結果では少くとも 4 つの性格性別の異なる声が出ると思われる。手放しに喜べないが、少くとも現状のアニタレよりは十分マシな部類だろう。

## 5 おわりに

このたびは御購入頂きありがとうございます。

TCVV として念願のコミケット参加を果し初めての本を発刊することが出来ました。

今回は、主に WEB で連載してきた「がんばれ!みやむー」の総括を行ったわけですが、

極めて少ないページ数だったにもかかわらず、巧くまとめきれませんでした。

これは声優についての考察がまだまだ甘いため、自分の考えが出来ていないものと痛烈に反省しています。

普段は WEB の方で書いているので間違いがあってもリアルタイムに訂正記事が出せるのですが本の場合は一度、印刷されてしまうと訂正が効かないものです。

そのため、慎重になるのですが元来の遅筆が祟って、白書と言いつつまとまりのないものになってしまいました。

そんな中、今回、試論ながらベクトルを用いた声優の声質評価方法というモノを発表し、これまで WEB では書いたことのない内容をお届けしました。

まだ数学的には不明確な部分ばかりですが、さらなる研究を重ね、是非理論化したいと思っています。

また最近、痛烈に思うことは、やはりメディア、とりわけ雑誌の影響力は強いということです。

「使えんアニタレをあれだけ擁護するのか小一時間問い詰めたい。」

という気持ちで一杯です。

まあ、とにかく今は発表出来ただけで満足です。

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

2001 年 12 月 28 日 TCVV 議長 萱沼真一

TCVV 白書

発行 「声優は Visual に出るな!会議」

組版 L<sup>A</sup>T<sub>E</sub>X2e (FreeBSD&Linux)

発行日

2001 年 12 月 29 日 (初版)

2002 年 9 月 30 日 (インターネット公開版)

連絡先

「声優は Visual に出るな!会議」

代表者 萱沼真一

URI <http://www.tcvv.org>

Copyright (C) 2001,2002 The council of 'Voice actors should not appear in Visual'

本文に一切変更を加えず、この著作権表示を残す限り、この文章全体のいかなる媒体における複製および配布も許可する。



